

自然の中で遊んで「谷戸」を再生

ゆるり 湘南

里山をよみがえらせる会(平塚市)

平塚市西部の山と谷とが入り組む「谷戸」と呼ばれる野山で、ボランティア団体が「子どもたちに昔ながらの里山遊びをしてほしい」と、里山の再生と整備をしている。年間を通じて米や野菜も作り、活動は20年を超えた。

「こっちの木の方がいい」「いや、こっちだよ」。小高い山の上で昨年未、ヘルメット姿の男性たちが雑木林を見渡し、切り出す木を選んだ。ボランティア団体「里山をよみがえらせる会」(同市)の会員たちによる、冬恒例のシイタケ栽培企画用の原木切り出し作業だ。

会員の1人がエンジン音を響かせ、チェーンソーで根元の一部を切り込む。そして、ロープを付け、3人がかりで「そーれっ」。ぐ

と山側に引っ張ると、周囲の木に枝を引っかけて「ばさばさ」と葉を落としながら、ゆっくりと倒れた。1メートルほどの長さに切り、参加した十数人がそれぞれ担いで運搬車に積み込んだ。1本の重さは20キ

ロイ、前後あつた。秋元隆二さん(49)は平塚から東京に通う会社員。車ですり足るだけで、これだけの自然がある。うれしいですね。小学4年の長女詩さん(10)、小学2年の次女綿さん(7)は作業を横目に、急斜面に生える木の下から伸びるツルにぶら下がった。ターザンごっこだ。この日の作業は2時間ほどで終了し、参加者は

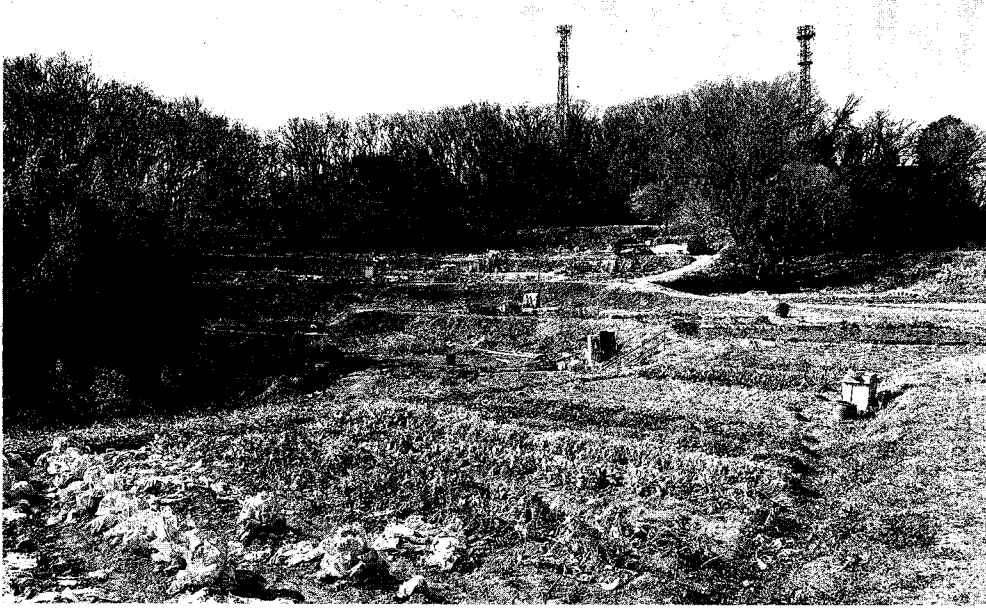
「お疲れさん」とジューズや水でのどを潤した。会の活動拠点は、木を切り出した山に近い「里山体験フィールド」と名付けられた谷戸地形の野山。段々畑と棚田からなり、山側には竹で作ったツリーハウスやシーソーがある「里山体験ゾーン」がある。中腹付近には畑や農機具の置き場があり、下の谷は棚田が広がる。市中心部から10キ

ロイ、荒れていった。戦後の生活様式の変化で人が山に入って木を取らなくなり、竹やぶが生い茂った。会は2000年に設立。この土地を借り、少しずつ整備を進めてきた。今年度も、竹林の一部の間伐に取りかかっている。会員は、里山の整備のほ

か、市民向けの米作り体験の場の提供、環境教室の開催も手がける。年齢は、子どもから80代までだが、中心は70代。保育園などがある「体験ゾーン」を利用する際には、遊びのアシスタント役も務めている。

会員の小林勤さん(71)は元会社員。定年を迎えるころ、ボランティアをしたいくと複数の団体を見て回り、入会した。「こんなところがあるなんて全然知らなかった」。チェーンソーや草刈り機の手がけ、今は大根や里芋の収穫に忙しい。里山の木々は、年末年始にかけてすっかり葉を落とした。落ち葉を斜面に敷き、そりに乗って滑る「落ち葉滑り」の季節がやってきた。会長の荒井啓三さん(71)は、子どもたちの歓声を聞くのが楽しみだが、コロナ禍は気がかり。フィールドで活動する会員に感染拡大防止対策を取るよう呼びかけ、「準備万端にして、子どもたちが来るのを待っています」。

今年、受け入れの事前準備に重点を置き、子どもたちが遊びに来た際のアシストは、引率の先生たちを中心にやってもらおう。こんな新たな運営方法の下、子どもたちには引き続き、このフィールドを楽しんでもらおうとも考えている。



谷戸に広がる里山体験フィールド。いずれも平塚市土屋



竹登りをする子どもたち。里山をよみがえらせる会提供



竹で組んだツリーハウス

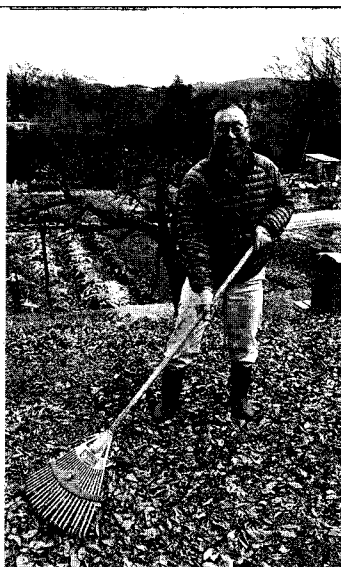


斜面に敷いた落ち葉の上をそりで滑る子どもたち。里山をよみがえらせる会提供

里山をよみがえらせる会は、昨秋に設立20周年を迎えた。会員数は約60人。里山体験ゾーンは2005年から子どもたちを受け入れており、19年度の延べ参加者数は保育園など28団体約2400人。鳥や小動物が驚くため、犬は入れないという。団体で利用する際の申し込みや問い合わせは、荒井会長(090・8316・9872)へ。

今年、受け入れの事前準備に重点を置き、子どもたちが遊びに来た際のアシストは、引率の先生たちを中心にやってもらおう。こんな新たな運営方法の下、子どもたちには引き続き、このフィールドを楽しんでもらおうとも考えている。

(斎藤茂洋)



里山体験フィールドで落ち葉を集めてみせる荒井啓三さん



シイタケ栽培用の木を運ぶ会員たち。運搬機は会員が農機具を改造した